

「名詞＋名詞」の結合

要 春 光

0. 序 論

1. 目 的

Shakespeare に ‘Brevity is the soul of wit.’⁽¹⁾ ということばがあるが、ことばの世界に生きているわれわれは、より簡潔な表現を好む。英語において簡潔な表現をもたらすものの一つに名詞表現があり、さらにその一つに「名詞＋名詞」の結合があって、今日盛んに用いられている。本論文においては、英語における「名詞＋名詞」という結合を、主として形態的な面から研究するものである。第Ⅰ部では、「名詞＋名詞」の働きを扱う。第Ⅱ部では、「名詞＋名詞」の結合における語順について扱う。第Ⅲ部では、「形容詞＋名詞」との関連性などを扱う。

2. 限 定

本論文において扱う「名詞＋名詞」の結合とは、複合語と、「修飾語＋被修飾語」という関係をもつ語群のことである。したがって、次のようなものは本論文においては扱わない：

(1) The word *andiron* seems to tell much the same story.⁽²⁾ における、word と *andiron* のような関係のもの。

(2) A long series of compounds denote bottles, boxes, or similar receptacles, ...⁽³⁾ における、bottles と boxes のような関係

34 「名詞+名詞」の結合

のもの。

- (3) In general, affixes are subsidiary to roots, while roots are the centers of such constructions as words. Roots are frequently ⁽⁴⁾における, words と roots のような関係のもの。

また, この「名詞+名詞」の結合を書き表わすのに, 三つの方法がある。

- (1) 2語を離して書く。(home work, reading room, etc.)
- (2) ハイフンを用いる。(home-work, sitting-room, etc.)
- (3) 1語につづる。(homework, bedroom, etc.)

home work の例に見られるように, 人または辞書などによって, 書き方が異なるものがあるが, 本論文においては, *The Random House Dictionary of the English Language* を参考にして, 主として, 離して書き表わされたものを—(1)の方法によるものを—取り扱う。

3. 資 料

「名詞+名詞」の結合を, 豊富な英語の語彙の中から, 適当な数を, しかも意味のあるように選ぶということは, 容易なことではない。

そこで, Alice Morton Ball 著の *The Compounding and Hyphenation of English Words* (Funk & Wagnalls, 1951) を選び, この中にある *Alphabetic List of Two-Noun Phrases* を資料として用いた。このリストは, 著者も言っているように, 'much less comprehensive' ではあるが, 2770 の two-noun phrase が採録されている。これらのうちかなりのものが, *The Random House Dictionary of the English Language* に見出し語として出ている。

この著者によれば, 複合語の定義は次のようである:

"A compound word is a single word composed of any two or more words joined together, either with or without a hyphen."⁽⁵⁾

また、このリストは、この本における次の規準にもとづいて作成されている。

“Two or more words used together in either regular or inverted word order, without ambiguity or restricted joint meaning, should not be compounded. More specifically:

Two nouns, gerunds included, if the first clearly functions as an adjective and the two are not used jointly with specialized or non-literal meaning or to qualify another noun.”⁽⁶⁾

なお、このリストを逆配列にしたリストを作成し、第Ⅱ部ではそれを参照した。

註

- (1) *Hamlet*, II, ii, 90.
- (2) A. M. Marckwardt, *American English*, (New York : Oxford University Press, 1966), p. 63.
- (3) O. Jespersen, *A Modern English Grammar*, (London : Allen & Unwin, 1965), p. 145.
- (4) H. A. Gleason, *An Introduction to Descriptive Linguistics*, (New York : Hold, 1965), p. 59.
- (5) Alice Morton Ball, *The Compounding and Hyphenation of English Words*, (New York : Funk & Wagnalls, 1951), p. 3.
- (6) *Ibid*, p. 4.

I. 「名詞＋名詞」の働きと種類

1. 「名詞＋名詞」の働き

どの言語にも、それぞれ、文構造、語順、文法範疇などの文法の組織、すなわちシンタックスがあって、語と語が任意に結合しても、必ずしも言語表現にはならない。言い換えると、シンタックスによって、—必ずしもこれだけとは言いきれないが—それぞれの言語表現は成り立っ

ているのである。そして、どの言語においても、それぞれの言語表現となりうる語と語の結合にはかなりの制限があって、結合の可能性という点から見ると、いわゆる結合の型というものは、むしろそれほど多くはないようである。

「名詞+名詞」という結合も、言語によって、認めるものもあれば、認めないものもある。日本語などはこれを認めるほうで、非常によく用いる。たとえば：

「高等教育」(higher education), 「伝統文法」(traditional grammar), 「構造言語学」(structural linguistics), など。

すなわち、日本語のシンタックスどりの結合なのである。

しかし英語においては、どうも名詞と名詞が結合するということは、シンタックスに反するようである。言い換えると、英語では名詞と名詞は結びつきにくい性質をもっているようである。ところが、この「名詞+名詞」の結合は、エリザベス朝時代には盛んに用いられており、Shakespeare にもかなり見られる。たとえば：

a *Barbary horse* (*Othello*, I, i, 112), *heart-strings* (*Ibid*, III, iii, 261), *summer flies* (*Ibid*, IV, ii, 66), a *sycamore tree* (*Ibid*, IV, iii, 41)⁽¹⁾, etc.

その後衰えたが、Mod E で再び回復し、PE では非常に盛んに用いられている。主に、新聞、雑誌、広告文、それに学術書などに多く用いられ、特にアメリカ英語はに著しく見られる。たとえば：

gold price, *heart transplantation*, etc.⁽²⁾

Earth Day, *police barricades*, etc.⁽³⁾

The 24 hour camera (Kodak), *Ronson Rosewood Furniture for smokers* (Ronson)⁽⁴⁾, etc.

compound noun, *function word*, etc.⁽⁵⁾

これらの例に共通していることは、スペースにかなりの制限があるた

め、より簡潔な表現が必要とされていることである。すなわち、多くのことばで表わされるべき概念を、より小さな表現で表わさなければならぬのである。上にあげた例や、次の前置詞を用いた表現と比較した例などからわかるように、「名詞＋名詞」という結合による表現は、より小さな表現でありながら、いわゆるシンタックスどうりの表現よりも、簡潔で、ぴったりしたものになっている。

前置詞を用いた表現と比較した例：

a wine glass : a glass (used) for (serving) wine

a door handle : a handle at [of] a door

さらに、「名詞＋名詞」の結合は、「形容詞＋名詞」の結合とは、—これらの関係については、次の第Ⅲ部で詳しく扱うが—異なった意味を表わすことができる。たとえば：

family name : *familiar name*

silk hat : *silken hat*

goldeye (a kind of fish) : *goldeneye* (a kind of birds)

以上のことをまとめてみると、「名詞＋名詞」の結合によって、ある概念をより簡潔な表現で表わすことができるということである。特に、新しい概念を表わす表現として向いているようである。このことは、語彙の増大ということに大いに関係がある。すなわち、名詞と名詞の組み合わせによって、無限の *phrase* をつくりうるということである。こうしてみると、前に「名詞＋名詞」の結合は、どうも英語のシンタックスに反するようだと述べたが、‘*asyntactic*’として扱うよりも、むしろシンタックスにかなっている、としたほうがいいのではないだろうか。

これまで、英語の語彙は、他の諸言語の語彙に比べてかなり多いと言われてきている。⁽⁶⁾ その主な理由として、借用語がはなはだ多いということがあげられるが、この借用ということを別にすれば、英語の語彙を増大する方法には、複合、派生、語根創造がある。この「名詞＋名詞」の

38 「名詞+名詞」の結合

結合は、複合ということになるが、無限の語彙増大能力を秘めているので、英語の語彙はますますふえるであろう。

2. 「名詞+名詞」の種類

I. 複合語と「修飾語+被修飾語」の語群

「名詞+名詞」の結合には、いわゆる複合語と、そうでない、語群一本論文で扱っている、「修飾語+被修飾語」の関係をもつ語群とがある。例をあげてみると、次のようになる：

複合語………*cannon ball, grammar school, post office, etc.*

語 群………*fellow citizen, gold ring, stone wall, etc.*

このように分けることは、しかしながら、学者によって必ずしも同一ではない。たとえば、Jespersen⁽⁷⁾ は、このように分けることはせず、これらはみな複合語としている。ところが、Bloomfield⁽⁸⁾ やその説を認める学者たち—たとえば、H. A. Gleason⁽⁹⁾ —は、上のように、複合語とそうでない語群とに分けている。

これは、結局、複合語の定義の違いからきている。言い換えると、何を基準として複合語とするか、という点で異なっているのである。Jespersen は、意味だけを基準としたり、形態の上から基準を決めたり、さらに Bloomfield の言うような、強勢の型を基準とすることも、よくないとしている。そして、次のように述べている：

As formal criteria thus fail us in English, we must fall back on semantics, and we may perhaps say that we have a compound if the meaning of the whole cannot be logically deduced from the meaning of the elements separately, ... (*A Modern English Grammar*, VI. p. 137)

一方、Bloomfield も意味を基準とすることはよくないとしている。(*Language*, 14 .1—2)。そして、強勢の型こそ複合語かどうかを決め

る基準である、としている。すなわち、強勢に4つの段階の区別が認められ、これを強いほうから順に／／へゝゝ／で表わすと、この「名詞＋名詞」の結合には、二通りの強勢の型が認められるが、複合語は、／／＋ゝ／の型（「第1強勢＋第3強勢」の強勢型）をもつものとし、語群のほうは、／／＋／／の型（「第2強勢＋第1強勢」の強勢型）をもつものとしている。（*Language*, 11. 6; 14. 2）。

強勢の型を基準にすると、確かに複合語かそうでないかの区別は非常にはっきりするようであるが、Jespersen も反対しているように、いわゆる従来複合語と呼ばれてきているものでも、この／／＋ゝ／の型でないものはみな除かれてしまう、というところに異論もあるようである。しかしながら、Bloomfield の説のほうがうまくいくので、優勢のようである。（*Eigogaku Kenkyu : Studies in English Philology*, p. 152）。Gleason, その他の学者たちもこれを受け入れ、発展させている人が少なくない。わが国の「新英文法辞典」（*Dictionary of English Grammar*, pp. 771—772）も、これに従っている。

本論文においてもこれに従い、「名詞＋名詞」の結合を、複合語と「修飾語＋被修飾語」の語群との両面から扱うことにした。

Ⅱ．「名詞＋名詞」の要素間の関係

本論で扱っているのは、「名詞＋名詞」の結合である。したがって、*deficit spending, sightseeing, etc.; sleeping car, walking stick, etc.*

などのような、「名詞＋動名詞」、または、「動名詞＋名詞」という結合は、厳密に言えば、この中にははいらない。しかしながら、動名詞は本来名詞であったし、名詞と同じような分布をしている。資料として用いた、A. M. Ball の *The Compounding and Hyphenation of English Words* の中の *Alphabetic List of Two-Noun Phrase* でも、動名詞

40 「名詞+名詞」の結合

をいれているので、本論でもこの結合もいれることにする。

さて、この「名詞+名詞」の結合の型を示すと、(1) 限定、(2) 並列、(3) 同格、のように分けることができる。例をあげると、次のようになる：

(1) 限定…*ankle bone, golf ball; gold leaf, tiptoe, etc.*

(2) 並列…*actor-director, sapce-time, etc.*

(3) 同格…*maidservant, queen mother; haphazard, page boy, etc.*

「名詞+名詞」の結合の第1要素をA、第2要素をBとすると、説明が簡単になるので、これから「名詞+名詞」の結合を、必要に応じて、‘A+B’で表わすことにする。

(1) 限定。

二つありあって、次のようになる：

(i) 第1要素が限定詞で、第2要素が主要語の場合。すなわち、AがBを限定するもの。図で示すと：

$$\triangle + \triangle B = \triangle B.$$

(ii) 第1要素が主要語で、第2要素が限定詞の場合。すなわち、BがAを限定するもの。図で示すと：

$$\triangle A + \triangle B = \triangle A B.$$

(i) の型は、「名詞+名詞」の結合において、最も多いものである。広い意味での、「修飾語+被修飾語」である。そこで、AがBを限定、修飾するといっても、これらの間の意味の上で関係はどうなっているのか、という問題が生じてくる。しかしながら、このことは以前から研究されてきているが、さまざまな場合が考えられ、いまだ究明しつく⁽¹⁰⁾されていない。したがって、よく見られる分類で、主なものだけをあげ

てみると、次のようになる。

(a) Bの動作の主語になっている：*bloodstream, fleabite, wolf pack, etc.*

(b) Bの動作の目的語になっている：*color guard, gunshot, nutpick, etc.*

(c) 場所を表わす：*field gun, sea breeze, world power, etc.*

(d) 時を表わす：*Christmas tree, morning star, spring fever, etc.*

(e) 材料, 原料を表わす：*corn whisky, iron lung, paper money, etc.*

(f) 使用目的, 道具, 手段を表わす：*dinner table, handsaw, pressure cooker, etc.*

(g) 性別, 身分を表わす：*manservant, queen bee, woman suffrage, etc.*

(h) その他 ((a) ~ (g) までにははいらないが説明のつくもの, また, 説明しにくいもの, などを含む)：*air raid, fountain pen, goldfish, life insurance, rainbow, sun dance, etc.*

この (i) の型の結合は, これからも大いに利用されるであろうが, 「形容詞+名詞」の結合との関係という点で一たとえば, 同じことを表わしている場合には, どちらがより多く用いられる傾向にあるのか, など—非常に興味をもたらしものである。

(ii) の型は, 英語にはほとんどない。わずかに, *MacArthur, MacDonald* のような *Mac-* (= son) の型の人名や, *Kirkcaldy, Kirkcudbright* のような *Kirk-* (= church) の型の地名などの固有名詞に見られる。Jespersen は, このほかに *tiptoe, gold leaf, noonday, etc.* をあげている。(*Modern English Grammar*, VI. 8. 3.)

(2) 並列。

第1要素と第2要素を合わせて、はじめて生じる意味である。Aのみでも、Bのみでも、完全な意味をなさない。この点で、次の同格とは異なる。図で示すと次のようになる：

$$\triangle A + \triangle B = \triangle AB.$$

この型の結合は、学術書や新聞、雑誌に多く用いられている。例をあげると、次のようである：

actor-action type, compound-complex sentence, etc. ⁽¹¹⁾

a diamond-chip watch, an Earth Day audience of students, etc. ⁽¹²⁾

(3) 同格。

二つありあって、次のようになる：

(i) 第1要素と第2要素が、いくぶん重なるもの。図で示すと：

$$\triangle A + \triangle B = \triangle AB.$$

(ii) 第1要素と第2要素が同義語で、それを重ねたもの。図で示すと：

$$\triangle A + \triangle B = \triangle AB.$$

(i) の型は、Aでありながら、同時にBでもあるものである。例としては：

boy-king, fighter-plane, maidservant, etc.

などがあげられるが、これらは、(1) 限定の (i) の型とも考えられるので、問題のあるところである。一般には同格の中にいれられているが、純粹には同格というより、むしろ限定のほうに近い。この関係は、さらに研究されなければならない。

(ii) の型は、同義語を重ねたもので、Aのほうは狭い意味を表わし、Bのほうは広い意味を表わしている。例としては：

courtyard, dwelling house, subject matter, etc.

なお、A. M. Ball の *Alphabetic List of Two-Noun Phrases* にははいっていないので上では扱わなかったが、「名詞+名詞」の結合に、第1要素が属格のものがある。すなわち、‘A’s + B’ という結合である。これは上の分けかたからいくと、(1) 限定の (i) の型にはいる。これには、形の上から次のように二つありある。

(a) 古い属格のもの。

(b) アポストロフィをつけたもの。

(a) のほうは、1語につづられ、主にBに人 (-man, -woman, folk, people, etc.) がくる。たとえば：

kinsman, saleswoman, townsfolk, townspeople, etc.

がある。

(b) のほうは、主にAに人や動物がくる。これは離して2語につづられる。しかし属格にしないで用いることもあり、その場合には、ハイフンを用いるか、1語につづられることが多い。例としては：

baker's dozen, cat's paw, dog's ear, lion's share, Mother's Day, etc.

現代英語では、属格は、成句や慣用句を除くと、所有・主語的關係を表わす場合以外には、*of*-phrase で代用されることが多い。しかしながら、‘A’s + B’ という結合を利用すると簡潔なため、特に新聞や雑誌などによく用いられる。

the defendant's claim, De Gaul's law, moon's surface, etc.⁽¹³⁾

the Bishop's view, the Congregation's questions, etc.⁽¹⁴⁾

以上、第I部では、「名詞+名詞」の結合の働きや、要素間の関係などを見てきた。特に、要素間の関係などはいまだ研究しつくされていないため、興味ある問題として、今後の研究をまたなければならない。し

44 「名詞+名詞」の結合

かしながら、「名詞+名詞」の結合を利用することによって、より小さな表現でありながら、多くのことばを必要とするような、より大きな概念をも、簡潔に表現できるのである。ここにも、有限な単位で無限の世界を相手にしている、ことばの宿命がうかがわれる。

註

- (1) A. Schmidt, *Shakespeare-Lexicon*, 2 Vols, (Berlin : Walter de Gruyter, 1962).
- (2) *The Japan Times*, Nov. 20, 1970.
- (3) *The New Yorker*, May. 2, 1970.
- (4) *Ibid.*
- (5) M. Yasui, *Eigogaku Kenkyu (Studies in English Philology)*, (Tokyo : Kenkyusha, 1965).
- (6) Fernand Mossé, *Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise*, tr. by T. Gunshi and H. Okada, (Tokyo : Kaibunsha, 1963), pp. 194—195.
- (7) *A Modern English Grammar*, (London : Allen & Unwin, 1965), VI. 8. 1—8.8.
- (8) *Language*, (London : Allen & Unwin, 1965), 14. 2.
- (9) *An Introduction to Descriptive Linguistics*, (New York : Holt, 1965), 8. 25.
- (10) Jespersen, *Modern English Grammar*, VI. 8.22 ; R. W. Zandvoort, *A Handbook of English Grammar*, (Tokyo : Maruzen, 1970), 807 ; C. C. Fries, *American English Grammar*, (Tokyo : Maruzen, 1968), pp. 274—275.
- (11) T. Otsuka, (ed.), *Shin-Eibunpo Jiten (Dictionary of English Grammar)*, (Tokyo : Sanseido, 1970).
- (12) *The New Yorker*, May 2, 1970.
- (13) *The Japan Times*, Nov. 20, 1970.
- (14) *The New Yorker*, Apr. 25, 1970

Ⅱ . 「名詞+名詞」の結合における語順

第Ⅰ部では、「名詞+名詞」という結合の、働きとその種類などを扱

った。そして「名詞＋名詞」の結合における要素間の関係は（第Ⅰ部，2－Ⅱで扱ったが），修飾という点から見ると，大きく分けて，次のような三つになる：

- （１）第１要素が修飾語で，第２要素が被修飾語，という関係。
- （２）第２要素が修飾語で，第１要素が被修飾語，という関係。
- （３）並列や同格のように，特にどちらが修飾語で，どちらが被修飾語とは，決めにくいような関係。

そこで，この第Ⅱ部では，「名詞＋名詞」の結合を，語順と修飾という関係から扱う。言い換えると，名詞修飾語—この場合は，修飾語は１語で，名詞である—における，語順ということになる。

1. 「修飾語＋被修飾語」

英語では，「名詞＋名詞」の結合中，この関係のものが最も多い。資料として用いた *Alphabetic List of Two-Noun Phrases* では，みんなこの関係にある結合である。

これは，近代英語における語順の確立ということに非常に関係がある。古期英語以来の屈折語尾は，近代英語になって消失してしまった。そのため，近代英語では語順が重要な役割を果たすことになった。特に次の二つのことは，語順によって，それが決定されるようになった。

- （１）動作の主客関係。これは，行為者—行為—目標という構造によって示される。
- （２）修飾の方向。これは，修飾語—被修飾語という構造によって示される。

このように，語の配列順序によって文法的関係などを示すのが，近代英語の用法の型である。ところで，修飾語と被修飾語の位置，というか，配列順序は，上で述べたように，一般に修飾語が先行するのが原則のようである。すなわち，「修飾語—被修飾語」の順に置かれるのである。

46 「名詞+名詞」の結合

そこで、名詞の前にくる名詞修飾語を、相対的な語順による基本型で表わし、それに名詞の直前を I として番号をつけてみると、次のようになる。

all the ten fine old stone houses

VI V IV III II I N

これからわかるように、「名詞+名詞」の結合は、I + N という結合になる。言い換えると、単一の修飾語として用いられる場合は当然のことであるが、名詞修飾語としての機能を持つ名詞は、すべてと言っていいくらい、その修飾する名詞の直前に位置しているのである。この名詞の直前の位置というのが、その名詞を修飾する語の位置なのである。

C. C. Freis⁽²⁾によれば、13世紀の終りごろまでに、名詞に先行する位置が、名詞あるいは形容詞という語類に属する単一修飾語の現われる位置になった。そして近代英語では、位置だけで修飾関係を示すことができるようになり、17世紀後半以来、名詞は、形態上単数でも複数でも、他の名詞の前に置かれることによって、しだいに修飾語化していった。現代標準英語を調査した資料においては、1489個の単一の形容詞的修飾語のうち、94.9%がその修飾する名詞の直前に位置し、その名詞の後に位置するのは、わずか5.1%である。そして、修飾における要素間の関係は、種々様々で、時にははっきりしないこともあるが、修飾の方向については、まぎれもなく明らかである。

このように、名詞の直前の位置、すなわち「名詞+名詞」の結合における第1要素の位置こそ、名詞を修飾する語のしめる位置なのである。このことから、「名詞+名詞」の結合というのは、ほとんどすべてが「修飾語+被修飾語」の構造だと言える。

以上、名詞修飾語だけについて述べたが、その他の修飾語についても、近代英語における語順の確立とその語順の及ぼす圧力によって、次のように、一般原則ではあるが、修飾の方向を知ることができる。

- (1) 単一の修飾語は、被修飾語の前に置かれる。
- (2) 語群から成る修飾語、つまり句や節の場合は、被修飾語の後に置かれる。

(ただし、これは一般的な原則であって、たとえば副詞の場合のように、単一の修飾語でも被修飾語の後に置かれるものもある。

It is large enough. ; He worked hard. etc.)

だから、次のように、個々の構成要素は同じでも、語の配列順序によって、意味に違いが生じるのである。

a flower garden : a garden flower

All nearly died. : Nearly all died.

2. 「被修飾語＋修飾語」

「名詞＋名詞」の結合で、この関係を示すものはほとんどない、と言える。第Ⅰ部(2—Ⅱ—(1)—(ii)) であげたように、わずかに固有名詞に見られるほかは、次のようなフランス語やラテン語の影響によるものに、わずかに見られるくらいである。

gum tragacanth, prince consort, etc.

これは、1. で述べたように、近代英語における語順の確立による影響である。古期英語では、比較的自由に、修飾語は被修飾語の前にも、後にも置かれた。屈折語尾によって、修飾の方向が理解できたからである。しかし、語の配列順序によって修飾の方向が示されるようになると、原則として、単一修飾語は被修飾語の前に、語群から成る修飾語は被修飾語の後に、それぞれ置かれるようになった。このような語順の及ぼす圧力によって、「名詞＋名詞」というように、二つの名詞がならば場合は、ほとんど修飾語—被修飾語という語順になる。だから、被修飾語—修飾語という語順になるのは、外国語からの借用語やその影響によるものなど、ほんのわずかしかない。

これらわずかなものが、特に借用語やその影響を受けたものが、語順の及ぼす圧力に対して、いつまでもちこたえ、この語順を続けるか、興味あるところである。なぜなら、外国語であっても、借用語として英語の中に取りいれられ使われるようになると、今度は英語の影響を受けるからである。「名詞+名詞」の結合においては、この被修飾語—修飾語という語順は、近代英語の持つ語順の圧力によって、やがて修飾語—被修飾語の語順にとって代わられるようになるであろう。特に、

gum Senegal : Senegal gum

(Senegal が修飾語で、gum が被修飾語。)

というように、両方の語順による表現形式があるものは、修飾語—被修飾語の語順のほうが使用頻度が高くなり、やがてはこの語順のみが用いられるようになるのではないだろうか。

ついでながら、上にも述べたように、近代英語における語順によって、語群から成る修飾語は、被修飾語の後に置かれるのが原則である。すなわち、被修飾語—修飾語の語順になる。ところで、「名詞+名詞」の結合に、第1要素が属格形のものがある。今日の英語では、成句とか慣用句を除くと、所有または主語的關係を表わす場合以外には、*of*-phrase で代用されることが多い。この場合、前置詞を伴った語群から成る修飾語になるので、被修飾語の後に置かれる。すなわち、被修飾語—修飾語の語順になる。

3. 並列、同格などについて

この第Ⅱ部の初めに述べたように、特にどちらが修飾語で、どちらが被修飾語とは決めにくい結合である。

ただ同格の場合は、

boy-king, girl friend, etc.

などの例にしても、

dwelling house, subject matter, etc.

などの例にしても、どちらかという、第1要素は、機能としては、修飾語といってもいいような機能をもっている。だから、修飾語という点から考えるときには、同格は、「修飾語+被修飾語」の結合の中にいれておいて差し支えないのである。

並列の場合は、第1要素と第2要素とがあいまって、はじめて意味をなすのである。どちらかが主要語で、残りが修飾語という関係ではない。むしろどちらも主要語と考えていいのではないか。だから、この並列の場合には、語順にはそう意味がないと言える。第1要素と第2要素をいれ替えても、内容的にはあまり相違はない。‘A+B’でも‘B+A’でもいいのである。ただどちらかといえば、第1要素には短いものがきて、第2要素のほうには長いものが置かれているようである。言い換えると、並列の場合は、語のスタイルとか、発音のしやすさ（ごろのよさ）という点などから、語順が決まるのであろう。

4. そ の 他

「名詞+名詞」の結合において、ある名詞は第1要素にしか入れない、あるいは、第2要素にしか入れない、ということはどうもないようである。言い換えると、どの名詞も、第1要素にもなれるし、第2要素にもなれるのである。とは言っても、どの名詞もみな、同じ割合で、第1要素としても、第2要素としても用いられる、ということもないであらう。その名詞の持つ性質などから、おそらく、どちらか一方の要素として用いられる割合が、他のほうよりも多いのではないだろうか。このへんのところを、*Alphabetic List of Two-Noun Phrases* と、これを逆配列にした List を用いて、その中のいくつかの名詞を取り出し、それぞれの割合を実際に調べてみる。ただし、この List には 2770 の phrase しか採録されていないので、これより数がふえた場合には、多

50 「名詞+名詞」の結合

少その割合にも変動があるであろう。

名 詞	第 1 要素に用いられた例	第 2 要素に用いられた例
book	0*	9
box	8	8
field	25	5
fire	12	5
house	3	26
key	13	2
paper	5	20
station	2	18
trade	12	3
tree	1	20
war	14	0*
water	32	7

(表 I—第 1 要素として用いられた例の数と第 2 要素として用いられた例の数の比較)

* この 0 という数字は、たまたまこの *Alphabetic List of Two-Noun Phrases* の中にはその要素として用いられた例がない、という意味である。したがって、ここでは 0 であっても、実際にはその要素として用いられている例はあるのである。たとえば、*The Random House Dictionary of the English Language* には次のような例が見られる。

book end, book jacket, book list, etc. ; world war, etc.

以上、ここでは「名詞+名詞」の結合とその語順について、修飾という観点からみてきた。近代英語における語順の確立によって、修飾の方向が示されるようになると、名詞の直前の位置、この「名詞+名詞」の結合では第 1 要素の位置が、名詞修飾語の位置となった。したがって、「名詞+名詞」の結合は、ほとんど「修飾語+被修飾語」の結合になる。このように、名詞が形容詞的な役割を果たすようになって、前にも述べたように、名詞の自由な結合により、英語の語彙がさらにふえてい

った。

註

- (1) A. A. Hill, *Introduction to Linguistic Structure*, (New York : Harcourt, 1960), p. 176.
- (2) "On the Development of the Structural Use of Word-Order in Modern English," *Language* 16.

Ⅲ. 「名詞＋名詞」と「形容詞＋名詞」

第Ⅱ部でみてきたように、近代英語における語順の確立によって、名詞の直前の位置は、その名詞を修飾する語のくる位置となった。したがって、「名詞＋名詞」の結合における第1要素は、ほとんどが、修飾語としての機能を果たしており、「修飾語＋被修飾語」という結合になっている。

同じように、名詞修飾語に、「修飾語＋被修飾語」になるものとして、「形容詞＋名詞」がある。この「形容詞＋名詞」という結合は、英語のシンタックスどうりの結合である。そして、やはりこの結合にも、「名詞＋名詞」の結合と同じように、複合語と、そうでない語群とがある。強勢の型も、複合語は、／＼＋＼／の型（「第1強勢＋第3強勢」）であり、語群のほうは、／＼＋／＼の型（「第2強勢＋第1強勢」）である。例をあげると、次のようになる：

複合語………*bláckbìrd, públic schòol, whíte pàper*, etc.

語 群………*blâck bírd, públic líbrary, whíte páper*, etc.

ところで、「名詞＋名詞」の結合と「形容詞＋名詞」の結合に、第2要素の名詞は同じもので、第1要素の名詞と形容詞が同じ系列のもの、という場合がある。たとえば：

an *atom* bomb : an *atomic* bomb

52 「名詞+名詞」の結合

のようである。この二通りの結合によって表わされる意味が、同じ意味になる場合と、異なる意味になる場合とがある。例を示すと次のようになる。

(1) 同じ意味になるもの。

adverb phrase : adverbial phrase

culture contact : cultural contact, etc.

(2) 意味が異なるもの。

family name : familiar name

silk hat : silken hat, etc.

このうち、主として、同じ意味を表わす場合についてみていくことにする。現代英語では、第1要素に、名詞、形容詞のいずれが用いられるのか—あるいは、より多く用いられるのか—、という観点から、この「名詞+名詞」の結合と「形容詞+名詞」の結合との関連性を扱っていく。例は、主として、*The New Yorker* からとったものである。

(1) 第1要素が、原料、材料を表わすもの。

「～製の」、「～でつくられた」という意味を表わす場合には、名詞を用いることが多いようである。形容詞の形を持っていても、名詞の形のほうが用いられている。

an atom bomb ; a gold watch ; a silver inkpot ; a stone bridge ; navy wool blazers, etc.

繊維などを表わすものは、形容詞の形がないものが多く、またあったとしても、ほとんど名詞が用いられている。

a nylon carpet ; black polyester jersey, etc.

(2) 第1要素が、抽象的な概念を表わすもの。

形容詞の形はあるが、名詞のほうが用いられている。

the education process ; a glamor girl ; minority groups ; government troops, etc.

- (3) 第1要素が、場所を表わすもの。

city center; *role of world police*, etc.

- (4) 第1要素が、国名、地名を表わすもの。

形容詞の形がないものが多く、名詞の形がそのまま用いられている。形容詞の形があっても、名詞の形、その属格の形、が用いられることもある。

a New York priest; *1830 New England houses*; *the Mexican hierarchy*; *Mexico religion*; *Mexico's Communist Party*; *American priests*; *America's Vietnam policy*; *the United States hierarchy*; *purple China silk*, etc.

- (5) 第1要素が、時を表わすもの。

そのまま名詞の形で用いられている。

summer house; *night train*; *nineteenth-century ornaments*; *tomorrow's priests*, etc.

- (6) 第1要素が、使用目的物などを表わすもの。

形容詞の形がないものが多い。

cigar lighter; *the film cartridge*; *jam jar*, etc.

- (7) 第1要素が、人を表わすもの。

形容詞の形があっても、名詞の形が用いられているものもある。

Anglo-Saxon punctuality; *the Jewish people*; *the traditionalists' resistance*, etc.

- (8) 第1要素が、人名を表わすもの。

そのまま名詞の形で用いられる。形容詞の形を持っているものは、それが用いられることもある。

Carnegie Hall; *Kennedy Airport*; *raglan sleeves*; *Shakespeare-Lexicon*; *Shakespeare's Plays*; *Shakespearean Tragic*

54 「名詞+名詞」の結合

edy; *Shakespearian* Criticism, etc.

(9) 第1要素が、商品名を表わすもの。

形容詞の形はなく、名詞のみが用いられている。

the vulgar *Coca-Cola* culture; a *Xerox* copy, etc.

(10) 第1要素が、名詞の場合と形容詞の場合とでは、意味が異なるもの。

a *fashion* magazine (cf. a *fashionable* magazine);

a *mountain* hut (cf. *a *mountainious* hut);

a *peace* conference (cf. a *peaceful* conference), etc.

これらの名詞は、それぞれ同じ系列の形容詞にはない意味、あるいは、今はもうそれらの形容詞では用いられなくなった意味、を持っている。したがって、これらの名詞をそのまま修飾語として用いることになる。あるものは、すでに形容詞としての品詞も与えられている。その中の一つに *family* があるが、Jespersen は、この *family* について次のように述べている。

It is worth noting that the English adjective corresponding to *family* is not *familiar*, which has been somewhat estranged from its kindred, but *family*; family reasons, family affairs, family questions, etc...⁽¹⁾

(11) その他。

(i) 「形容詞+名詞」の結合で、第1要素の形容詞が、名詞の機能を果たしているものがある。例としては、次のようなものがある：

a *sick-room* (= a room for *sick persons/people*); a *poor-box* (= a box for *poor people*), etc.

(ii) 「形容詞+名詞」の結合で、あるものの特徴の一部を表わし、そのもの全体の名称となっているものがある。たとえば：

blue stocking (= woman having or affecting literary tastes and learning);

red coat (= British soldier);

white paper (= government report), etc.

(iii) 次の例のように、それだけでは、わかりにくいものがある。

a *Spanish* teacher;

a *deaf and dumb* teacher, etc.

この場合、これだけでは、

(a) 先生自身が、「スペイン人」、あるいは、‘deaf and dumb’である場合。

(b) 「スペイン語」を教える先生、あるいは、‘deaf and dumb pupils’を教える先生である場合。

のどちらにもとれる。強勢の上からは、いちおう、(a) の場合は／＼＋／＼の型となり、(b) の場合には／＼＋／＼の型となるようである。

大ざっぱではあるが、以上みてきたように、この「名詞＋名詞」の結合を利用すれば、特に、同じ系列に形容詞を持たないものなどは、前置詞を用いたり、まわりくどい言い方をしなくても、簡潔に表現できるのである。たとえば：

city center : the center of a city,

salad bowl : bowl (used) for (serving) salad, etc.

また、形容詞を持つものは、異なった意味に用いる場合以外は、一応二通りの表現が可能である。どちらを用いるかは、意味に誤解のないよう、文のスタイル、その他用いる人の好み、などによる。そして、どちらかといえば、特にアメリカ英語では、「名詞＋名詞」の結合のほうが多くなってきているようである。しかしながら、このように、二と

うりの表現ができるということは、語彙が豊富であることともあいまって、さらに英語における表現の方法を豊かにしている、といえる。

英語において、簡潔な表現をもたらす名詞表現の一つとして、「名詞+名詞」の結合についていろいろみてきたが、第1要素と第2要素の関係、「形容詞+名詞」との関係、その他、今後の研究をまたねばならない点が多い。そして、この「名詞+名詞」の結合は、複合語という問題にも関連しており、非常に興味のあるところなので、今後、さらに研究しなければならない。

註

- (1) *Growth and Structure of the English Language*, (England: Donald Moore Books, 1938), § 132.

BIBLIOGRAPHY

Articles and Periodicals

- Fries, C. C. "On the Development of the Structural Use of Word-Order in Modern English," *Language* 16. Series of the Teaching of English, Vol. 2. Translated and annotated by Yasui, M. Tokyo (Taishukan). 1968.
- Mitsui, T. "Shakespeare no Gikyoku ni okeru Fukugo-Meishi (On Compound Nouns in Shakespeare's plays)," *Eigogaku (English Philology)*, No. 3, pp. 81—99, ed. by Osaka English Philological Circle. Tokyo (Shinozaki Shorin). 1962.
- The New Yorker*. Published weekly by the New Yorker Magazine, Inc. New York.
- Ogawa, S. "Attributive to shite no Meishikei to Keiyoshi tonon Interchangeability (On Interchangeability of Adjectives and Substantival Attributives)," *Essays in honour of Prof. Fumio Nakajima*, pp. 237—252. Tokyo (Kenkyusha). 1965.

- Otsuka, T. "Cannon(—) Ball," *Eibunpo Ken'yu (English Grammar)*, Vol. I, No. 2, pp. 2—4; Vol. I, No. 3, pp. 9—12, ed. by Takabe, Y. Tokyo (Kenkyusha). 1957.

Books

- Ball, A. M. *The Compounding and Hyphenation of English Words*. New York (Funk and Wagnalls). 1951.
- Bloomfield, L. *Language*. London (Allen & Unwin). 1965.
- Bradley, H. *The Making of English*. London (Macmillan). 1927.
- Fernand Mossé. *Esquisse d'une Histoire de la Langue Anglaise*. Translated by Gunshi, T. and Okada, H. Tokyo (Kaibunsha). 1963.
- Fries, C. C. *American English Grammar*. Tokyo (Maruzen), New York (Appleton). 1968.
- Gleason, H. A. *An Introduction to Descriptive Linguistics*. New York (Holt). 1965.
- Gunshi, T. *Eigogaku-Note (English Philological Essays)*. Tokyo (Meiji Gakuin University, Gengo-Bunka Kenkyusho). 1968.
- Hill, A. A. *Introduction to Linguistic Structure*. New York (Harcourt). 1960.
- Hirose, T. *Meishi (Noun)*. Series of English Grammar, Vol. 13. Tokyo (Kenkyusha). 1967.
- Inui, R. *Bunshi-Domeishi (Particles and Gerund)*. Series of English Grammar, Vol. 15. Tokyo (Kenkyusha). 1969.
- Isshiki, M. *Shushoku (Modification)*. English Usage, Vol. 9. Tokyo (Kenkyusha). 1968.
- Jespersen, O. *Growth and Structure of the English Language*. London (Donald Moore Books). 1938.
- _____. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part VI (Morphology). London (Allen & Unwin), Copenhagen (Munksgaard). 1965.
- Lees, R. B. *The Grammar of English Nominalizations* (Indiana U. Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics, Publication No. 12.). The Hague (Mouton), Bloomington (Indiana U. P.). 1968.
- Marckwardt, A. M. *American English*. New York (Oxford U. P.). 1966.
- Mori, Y. *Gojun (Word-Order)*. Series of English Grammar, Vol. 23.

- Tokyo (Kenkyusha). 1968.
- Ogawa, S. *Keiyoshi (Adjective)*. Series of English Grammar, Vol. 8. Tokyo (Kenkyusha). 1968.
- Ota, N. *Tango no Kenkyu (Studies in Words — Etymology and Word-Formation)*. Tokyo (Shinozaki Shorin). 1960.
- Otsuka, T. *Eibunpo-Ronko (Studies in English Grammar)*. Tokyo (Kenkyusha). 1969.
- Shakespeare, W. *Othello*. Series of the Kenkyusha Shakespeare, Vol. 16, ed. by Ichikawa, S. and Mine, T. Tokyo (Kenkyusha). 1968.
- Toyama, S. *Shuji-teki Zanzo (Rhetorical Afterimage)*. Tokyo (Tarumi Shobo). 1965.
- Ueno, K. *Gokeisei (Word-Formation)*. Series of English Grammar, Vol. 25. Tokyo (Kenkyusha). 1968.
- Yasui, M. *Eigogaku Kenkyu (Studies in English Philology)*. Tokyo (Kenkyusha). 1965.
- _____. *Kozo Gengogaku no Rinkaku (An Outline of Structural Linguistics)*. Tokyo (Taishukan). 1964.
- Zandvoort, R. W. *A Handbook of English Grammar*. Tokyo (Maruzen), London (Longmans), Groningen (Wolters). 1970.

Dictionaries and Lexicals

- Fowler, H. W. *A Dictionary of Modern English Usage*. Revised by Gowers, E. London (Oxford U. P.). 1965.
- Ichikawa, S. (ed.) *Eigogaku Jiten (Dictionary of English Philology)*. Tokyo (Kenkyusha). 1965.
- Otsuka, T. (ed.) *Shin-Eibunpo-Jiten (Dictionary of English Grammar)*. Tokyo (Sanseido). 1970.
- Schmidt, A. *Shakespeare-Lexicon*. 2 Vols. Revised and enlarged by Sarrazin, G. Berlin (Walter de Gruyter). 1962.
- Stein, J. (ed.) *The Random House Dictionary of the English Language*. New York (Random House). 1967.